



女怪盗 *Phantom Thief Lunatic Maria*

# ルナティック マリア

恥辱のショウタイム

プロローグ	美少女怪盗参上!	006
第一話	過去と理由	023
第二話	潜入、トラップハウス	038
第三話	屈辱の脱獄	050
第四話	月下の散桜	076
第五話	汚辱の壁	109
第六話	尻奴隸	154
第七話	堕ちた偶像	201
エピローグ	美少女怪盗の最期	247

## 登場人物紹介

Characters



あまつか るな  
天使 瑠奈

昼間は白人ハーフの人気アイドルだが、夜になると裏の顔、巷を騒がす女怪盗として活躍する。

あまつか  
天使 マリア

瑠奈の母。十数年前ルナティックマリアの名で活躍したが、現在、行方不明。

ほうじょう みらん  
北条 美蘭

瑠奈のライバルを自称する人気アイドル。富豪の娘。性格が悪い一面も。

ほうじょう たいさく  
北条 大作

美蘭の父親。オーパーツを所持する大富豪。

## 第二話 潜入、トラップハウス

「ママ——今日、会えるんだよね」

犯行を予告した当日の夜。ツインテールの怪盗姿となった瑠奈は既に屋敷の前にいた。

今宵の——そして願わくば最後の——犯行現場は、いつもとはかなり雰囲気違った。ご丁寧にも正門が開かれたままだったし、何より毎度毎度大挙して押しかけてくるはずの警官連中が見当たらない。

自分をネタに金儲けしようという相手だ、警察はあえて追いかつたのだろうか。

（畏だつてことは最初っからわかっているんだから……今更ビビッてらんないわよ）

無人の門を潜り庭へと足を踏み入れる。そこはまるでゴルフ場のように巨大で、よく手入れされた芝生が無数のライトによって眩いばかりに照らされていた。

人工の光に浮かび上がる緑の海原を怪盗少女は一步一步進む。途中内壁沿いに植樹された木々の間で小さな光が幾度もちらついていた。監視カメラでこちらを窺っているのだろうか。

（何する気か知らないけど……そう簡単に見世物になんかなってやらないんだからね）

やがてたどり着いたのは白い壁の巨大な建物。邸宅、というよりは美術館やコンサートホールなどの施設のように見える。今まで忍び込んできた中でも、ずば抜けて巨大だ。

例によって入口は開かれている。中は暗闇だったが、怪盗が一步踏み出すや手前から奥

まで一気に電灯が灯っていった。

明かりに照らし出されたのは、随分と長い廊下だった。距離にしてざつと百メートルはあるだろうか。対面する向こう側のドアが米粒大に見えた。

《ハロー、ルナティックマリア。聞こえているかしら？》

そのとき、どこからともなく声が聞こえてきた。恐らく自分と同年代くらいの若い女性の声だ。どこかで聞いたことがあるような気もしたが、思い出せない。

「あゝ、な・に・も・き・こ・え・に・やゝい」

とりあえず少女怪盗は両手を耳元でパタパタさせつつそう返してやる。こんな悪ふざけに参加させられたのだ、一度はこちらも悪ふざけで返してやらねば気が済まなかった。

《……よ、余裕があるようで何よりだわ。さて——この屋敷にはいくつものゲームが待っているの。もしアナタがそれを見事突破できれば、お望みのものを差し上げるわ》

《声》が話している間も少女怪盗はきよろきよろと廊下を見回し、やがて天井近くにカメラを見つけるや、

「フン、アンタたちがネットで大々的に広告打ってたからその程度知ってるわ。そうとわかって乗り込んできてあげたんだから、ちゃつちゃとゲームとやらを説明なさいよ」

両腰に手を当て、形よい顎をくつと前に出して。レンズの向こう側の相手を挑発する。

《オーケー、ルナティックマリア。さつそくゲームを始めましょう——第一のステージはこの廊下を制限時間内に渡りきることに。制限時間は——十分よ》

手短に説明された条件を聞き終わるや、ルナティックマリアはふふん、と鼻を鳴らした。「十分？ 十秒の間違いじゃなくて？」

上方のカメラ目掛け、ツインテールの怪盗は不遜な微笑を投げかける。

《それなら十秒で渡ってみればいいわ。そしたら次のステージは飛ばしてアゲル》  
少女怪盗の度重なる挑発に、「声」は更なる挑発で切り返してきた。

「ふうん……その約束、後悔するわよ」

言つてルナティックマリアはスプリンターののように床に手を着き膝を曲げる。

「よいいどんっ!!」

掛け声と共に少女は飛び上がり、ブロンドのツインテールをなびかせ弾丸のように廊下を駆け抜ける——かと思いきや。

怪盗少女はそんな予想をはぐらかすように、その場でびたりと立ち止まってしまふ。視線は上方のカメラを睨んでおり、その目つきは呆れかえったかのような半眼だ。

「なあってね——そんなに馬鹿だと思われてるワケ？ アタシって？」

意味ありげに眩き、はあつと深いため息ひとつ。そして手近にあつた花瓶からバラを一本抜き去ると、それを前方目掛けておもむろに投げつける——すると。

バリシューイツツ!!

凄まじい光と共に。バラは落雷でも受けたように木この端はみじん微塵に吹き飛んでしまった。

「わあ、あぶないあぶない♪」

芝居がかった口調で言いながら、女怪盗はマスクに指を添えると、今度は一転して小さな声で禱いのるように囁く。

「お願い、目の前に隠されたものを映して——」

次の瞬間、視界の景色は一変した。突き抜けるようだった廊下には今や無数の青白い光のラインが縦横無尽に張り巡らされ、女怪盗の行く手を阻んでいる。

「やっぱりね。しっかしいきなりレーザーでお出迎えとは大歓迎じゃないの」

《ふふ、小手調べよ。この程度の小細工に気づけないような三流に、我が屋敷に入る資格などないもの》

畏を見破る女怪盗にも、声はこともなげに嘯ささいてみせる。

「へええ……でも気づいたからには、土足で踏み荒らしちゃうんだからアンタのお家」

そう言つて一歩目を踏み出す。レーザーが可視化された以上、トラップは半分無効化したも同然だ。後は自分の力とオーパーツの補助でバランスを取りさえすればいい。

足元に張られたレーザーを飛び越え、腰の高さのレーザーを潜る。ツインテールが触れないように注意を払いつつ、プロンドの怪盗少女は踊るように四肢を駆使して熱線のジャングルジムを突き進んでゆく。

だが、その快進撃は長くは続かなかつた。

(け、けっこうきついじゃないの、これ……)

半分を越えた辺りで、怪盗少女は自分の見通しが随分と甘かつたことに気づかされる。

たかが百メートル。全力疾走すれば十秒ちよつとのその距離も、執拗に罠を仕掛けられた状態では恐ろしく遠い。

それに入付近では割と余裕があるように見えたレーザーとレーザーの間隔も、先に進むにつれ目に見えて狭まり、針穴に糸を通すような慎重さが必要になっていた。

胸の高さに足を上げ、あるいは膝の高さまで首を下げ。時には滑稽なポーズでもってなんとかレーザーをかいくぐってゆくが――。

ビシユンツッ!!

「くっ!!」

破裂音と衝撃、肌を焼くような熱が背中でもって同時に爆ぜた。

振り向けばコスチュームの背中部分に一直線の焦げ目がつき、白磁のようなミルク色の肌があらわが露わになっている。充分気をつけていたつもりだったが、迂闊うかつにもレーザーに掠さらつてしまったようだ。

(あ、危なかった……もつと慎重にいかなくちゃ)

怪我のないことを確認し、黒衣の少女怪盗は再び危険な前進を続ける。

しかしそんな彼女に茶々を入れるようにして、

《あらあらアナタ随分パンツが食い込んだるわよ？ お尻が大きすぎて、ちゃんとフィットするパンツが見つからなかつたのかしら？》

突然、声ががからかうように笑った。

桃肌に張り付いたタイトスカートは尻たぶを持ち上げるように張り詰め、その内側に秘められた純白のショーツが隠しようもなく晒されている。下着もまたここまでの激しい動きにより尻割れに食い込んで、むっちりとした桃房の一部がはみ出していた。

そしてそれは当然カメラによつて記録され――。

(見られてる――そっか、これ世界中のヒトに!!)

この屋敷での出来事がネット中継されていることを思い出し、思わずスカートに手を伸ばしそうになる。しかしレーザーが邪魔でうまく裾を直せない。

《ソフフ、これだけ言われてお尻出しっぱなしだなんて、やっぱりわざと見せつけてるのね、露出狂の女怪盗さん♪ それに白いパンツだなんて案外ウブじゃないの》

動けずにいる少女に対し、追い討ちを掛けるような嘲笑が浴びせかけられる。

(見られてる――見ず知らずの大勢の人たちに、あたしのお尻見られちゃってる――!!)

想像しただけで顔から火を噴きそうだった。アイドルとしてカメラに映ることには慣れている瑠奈だったが、水着グラビアの仕事など受けたこともない彼女にとって肌を晒すことは抵抗があった。

盗みに入る際に色香で警官を手玉に取ることもあったが、見せているのと見られているのではまるで意味が違う。

とはいえこんなところで恥ずかしがつてばかりもいられない。

(平常心よ、平常心……挑発になんか乗ってやらないんだから――)

胸の内ではひたすらそう呟きながら、少女怪盗は再び前へ進むことだけに専念する。しかしここに来て彼女も、このトラップの巧妙さを思い知らされることとなった。

脚を高く上げ、腰を屈める。その繰り返しは少しずつだが確実に、怪盗少女のタイトなスカートをずり上げるように仕組まれていた。

最初は下弦が覗いていただけの状態から、まるで柔肉が絞り出されるようにジワジワと桃房が剥かれてゆく。初めは裾がずり上がるたびにいちいち直していたのだが、レーザーの間隔が狭まってきたことで次第にそんな余裕もなくなり、尻たぶは布地からむんにゆりと顔を出していた。

そして黒衣の少女怪盗が輪のようなレーザーの隙間を潜らんと、思い切り腰を折って後方へと尻を突き出した瞬間。

ブルンッ！

「くっ!？」

不意にヒップラインを覆っていた圧迫感が消え失せた。同時に平手打ちを浴びせられたような衝撃が尻肉をぶるりと揺さぶる。限界までずり上がったタイトスカートが、腰まで捲れきってしまったのだ。今や完全に晒しものとなった白ショーツは尻溝に深く食い込んで無数の皺を走らせており、布地に収まりきらない逆ハート形の豊臀がその端から火に炙った餅みたいに、ぷにっとはみ出している。

露出した桃肌は白磁のように透き通る艶やかさ。緊張に汗ばんでじっとり湿り気を帯び



「おっ……おちんちんよっ……おちんちんを入れて欲しいのおっ……!!」

吼えるようなその口調とは打って変わって、ほとんど消え入りそうな声で男を乞う。

「だから、泥棒猫がおちんちんだなんてお上品すぎるだろうが。チンポって言え、おチンポあたしのケツマンコにぶちこんでくださいってなあ？」

「ケツマンコじゃまだ綺麗すぎる、こんな肉穴など、ザーメン便器で充分でしょう？」

そう言っただけの男が拘束具越しの桃房をさわさわと撫で回してきた。敏感になつていた桃肌への刺激は背筋に電流が走ったかのようだ。すぐさま振り払いたいところだったが、彼らの機嫌を損ねることは許されない。

「ほら、この下品なケツを差し出して、もう一度お願いしてみせろ」

パシッ！ 気安く豊臀を引っ叩ぽんかれ促される。

「くうっ……は、はいっ——」

悔しさに歯噛みしながら、それでも瑠奈はおずおずとその場に屈んで身を翻し四つんばいの姿勢をとった。プロンドのツイントールがばら撒かれ、床に幾何学模様を描く。

丸く開いた拘束具の臀部から覗く桃房は既に恥辱で桜色に染め上がり、ふつふつと汗の玉が浮かび上がっていた。そのすぐ下の股布部分は絶えずもぞもぞと蠢いており、膣内に入り込みうねる張型を連想させた。

「ほっ、乳も随分下品に育っておるわ……ほれほれ、ここも感じるのだろう？」

四つんばいになったおかげで重力に引かれる乳釣鐘を、脇に立った男が革靴の爪先でぐ

にぐにとつついてくる。

「くあううつ、胸えっけらないでっ…だっ、めええ…」

屈辱的すぎる扱いにも勃起乳首は浅ましく反応してしまい、蹴り上げられる乳房はたわむたびにじんわりと波紋のように広がる乳悦に酔った。

「ならさっさとおねだりの続きをするんだ、この浅ましい尻を振りながら」

今度は別の男が股座を靴先で小突く。ぐちゅりっ、とデイルドーが一段と深く肉壺をえぐり、淫らな振動が腰骨まで揺るがした。

「ひんぐっ!? ひやめっ、やるから足退けてっ、それっ感じすぎっ…ちやうのおおっ!!」

桃房をぶるんぶるんと震わせて懇願するも、男は面白がって股布部分から足を退けない。拘束具の脇からは見る間にじゅぷじゅぷと愛液が溢れ出して床にぼたぼたと垂れ始めた。

「ザッ、ザーメン便器いっ…はひっ…あたしはっ…ザーメン便器で…すうっ……んっっ」

紅潮尻をもぞつかせながら、瑠奈は与えられた言葉を頭の中でありつた下品に組み立てながらどうにか男を満足させようと恥ずかしい台詞を言い募る。

「ち、チンポ…皆さんの遅しいオチンポおっ…あたしのっ、ケツマンコに突っ込んでピュッピュしてくださいっ——あたしのケツ穴は、ごっ…ご主人様がたに気持ちよくザーメンをお出したくださいのためのおっ、おっ…おケツ便器なんですうっ!!」

女としての尊厳さえ踏みにじられるような思いで叫んだ奴隷の言葉に、男たちの嗜虐心はようやく満たされたようだ。

「ぎゃはは、やればできるじゃないか。よし、そのザーメン便器使つてやるぞ——ほら、自分で尻を開いてもつとよく見せてみる」

瑠奈の懇願を受けていた男は立ち上がると、尻を掲げる少女へそう命令する。

「は、はいっ……!!」

まるで奴隷に対するようなその扱いにも、必死な瑠奈は言いなりだった。命令通りに尻たぶへと手を掛けるとグツと左右に割り開き、薄紅色の排泄孔を露出させる。

むにいつと顔を覗かせた桃穴は相変わらず美麗な桜色をしており、すぐ傍で蠢く張型の刺激にピクッピクッと小刻みに痙攣を繰り返していた。

「ほうこれは綺麗だな、糞をひりだす穴にはとても見えん。今日もお仕事前にちゃんと糞を垂れてきたか、ルナティックマリア様のケツメドは？」

男は屈みこみ鼻先が触れそうなほどの距離で瑠奈の肛門を視姦しながら下品極まる質問をしてくる。熱い吐息が桃粘膜を焼き、刺激に尻穴がキュウツと激しく窄まった。

（やだっこんな近くでお尻の穴見られてる……においまで、きつと嗅がれちゃうっ……!!）

不浄の穴を間近に覗き込まれ、気絶しそうなほどの羞恥に体温が急上昇する。それでも男に逆らうことは許されない。

「ううっ………はい………してっ………して、きましたあっ………」

消え入りそうな声で答える瑠奈。男たちが自分の肛門を視姦しつつその排泄姿を想像していると思うと、恥ずかしさのあまり尻肌が朱に染まり一斉に粟立つ。

ハレンチな質問を浴びせた男は尻の丸みを確かめるように弧を描くようにして瑠奈の尻を撫で回して鳥肌を擦っていたが、少女の返答を耳にすると、

「おおそうかそうか、では腹の中は綺麗そうだな——どおれ」

ぬるれるおおおつ……。

意味深な呟きの後、生温かくぬちよりと柔らかな感触が桃粘膜にへばりついた。

瑠奈は最初何が起きたかまったく理解できなかったが、尾てい骨を擦る荒い鼻息に、男に肛門を舐められているのだと気づかされ、恥ずかしさが一気に沸点まで達する。

「いやああつおしりつ舐めちゃだめえっ!!」

逃げ惑う怪盗少女の桃尻をしかし男は腰骨をがっしりと押さえ込んで放そうとしない。

「騒ぐな。こんな小さな尻の穴では、しっかりほぐしておかないと切れてしまうぞ」

そう言つて男は執拗に、瑠奈のもつとも見られたくない穢れの部分を舌腹でべつとりと舐め回し、あるいは舌先でぐりぐりとドリルのようにほじくり返す。

同時に唇を放射皸の外周に沿わせてチュウッ! と激しく吸いたててつつ、更には括約筋を弛緩させるように舌先で皸の一本一本を丹念になぞってきた。

「ひんんうつつ!! いやあつお尻吸わないでえっ、こんなのいやああつつ!!」

まるで強制排泄を促すような男の下劣な行為に鳴かされながら、同時に背筋を迫り上げるゾクゾクとするような妖しい体感に困惑する。

人肌の生温かさとなメクジを思わせる不気味なぬらつき、弾力のある舌の柔らかさに晒

されて。気持ちが悪いはずなのに、舌の摩擦を受けるにつれてジンワリと滲むような痺れが肛門粘膜に広がってゆく。

(いやあつ…お尻までおかしくなる…お尻の穴まで、あたし変態にされちゃう—!!)

執拗なアニリングスに悦びを見出し始めた自分の身体を恐れ、怪盗少女は四つんばいの肢体をブルブル震わせる。

「ちつつまらん、あまり味はせんな…しかし奥のほうはどうかな？」

そんな少女の恐怖など知らない男は桃谷間へと更に顔を押し付けて、直腸深くへと舌を埋めた。

ぐにいいい…熱い肉塊がぐりぐりと螺旋を描きながら、本来物が入るべきでないところを無理やり遡上してくる。強引に割り開かれた肛門口が唐辛子に触れたみたいにかつと熱を持ちジンジンと鳴いた。

「ふあうつ、いやっそんな奥まで入っちゃだめえっ…んあおつ、ううくうう—っ…」

身体の内奥まで汚され、女の子なら一番知られたくない場所の臭いと味を暴かれて、パニックを起こしたように悲鳴をあげる。

(おなかの中に舌があつ…気持ちわるいつ…のにつ—きつ気持ちいつ…いいいつ!?)

不快感と快感のない交ぜになった未知の肛悦に身悶えている間にも、舌はにゆるにゆると卑猥に蠢いて熱に疼く直腸壁をじつくりと舐め回してきた。そうされるとどうしようもないくらいのことばゆさが全身を駆け巡り、身体をヒクヒクとわななかせてしまう。

加えて男の顎が股座に触れるとそれに押される形で張型がぐちゅつと陰唇に押し込まれ、より深い振動を子宮へと伝えた。肛門で感じるのとは違う慣れ親しんだ甘い喜びに一気に腰が蕩けそうになる。

「いい締めだ——舌を噛み千切られそうだ。これは念入りにほぐしてやらんとなにゆるるっ…ぷうっ。」

ようやく直腸から舌が引き抜かれる。しかし息つく暇もなく今度は舌よりずつと硬い感触が肛門に触れた。ペニスのような熱を感じない。恐らくは指先だ。

男は指で唾液をなじませながら括約筋を弛緩させるように放射線をゆるめると愛撫してくる。括約筋を引き締めようにも、舌のマッサージで弛緩した筋肉にはもう野太い指を押し返すだけの力は残っていない。

ぐりぐりぐりいいい…男は螺子ねじを巻くように、人差し指と中指の二本を一気に根元まで捻じ込んできた。

「んああっ…ふあっ、やだっおし…りいっ…ひいんっうっ！」

指がもたらす刺激は舌のそれよりずつとダイレクトだ。関節のゴツゴツとした感触が腸壁を擦るたび、ズンツ、と鈍い快感が身体の奥にまで響く。

「くくく、感じているのか？ こうするともっといいだろう？」

ぬぼっ、ぐにゆるるっ、にゅぽおっ、ぐにいいい…。

言いながら男は指をじっくりと出し入れし始める。引き抜かれる寸前深く押し込むその

動作に粘膜への摩擦を便意と錯覚させられて、肛門の辺りがキュンツと切なく疼く。そのせいで瑠奈は催してもいないのに漏らしてしまうのではと気が気でなかった。

「ほらほら、ケツがどんだん指を飲み込んでいくぞ」

第一関節に慣れると第二関節、更には根元まで——男は実に手際よく、瑠奈の肛門をほぐしてしまふ。気づいた頃には瑠奈の桃穴は既に人差し指だけでなく中指までも飲み込んでいた。侵入した指と腔道を犯すディルドーに薄い肉壁を挟まれて、張型の振動がより激しく少女の下腹部を刺激する。ブルブルと小刻みに摩擦される腔粘膜がじゅぷつと蜜を滴らせ内股に新たな筋を描いた。

「おやおやこの小娘、尻をほじくられて濡らしておりますぞ」  
「すぐさま男の一人が目ざとくそれを指摘してくる。」

「尻をちよつと弄られただけでこんなによがるとは……ククツ、お前アナルセックスの素質があるんじゃないのか？」

男が侮蔑にも似た賛辞を口にするが、そんなこと褒められても一ミリも嬉しくない。瑠奈はただ早くこの肛辱が終わってくれるのを願うのみだった。

それから幾度となく、グリグリと執拗に肛門をほじくり返され弄ばれた後。

「さあ、そろそろいいだろう」

にゅぽおっ……ようやく指が直腸内から引き抜かれた。

「んっ……はっあっ、くっ」



すつかり指になじんでしまったのか、桃穴は抜き去られる際名残惜しそうに吸い付いてしまう。軽く捲れ上がった肛門粘膜を夜の冷気に舐められて、少女ははしたない喘ぎを漏らした。

抜かれた指は少女の腸液でふやけきり、直腸の熱気に軽く湯気まで立ち上らせている。

「ククツ、いやらしい尻だ……お前、本当に尻するのは初めてか？」

指に絡んだ桃汁を舐め取りながら、男が興奮した声で少女をなじる。

「あつ、あたりまえ……でしょ……こつ、こんなつ……へつ変態みたい……ことつ——」

ジンジンと痺れる桃穴の疼きに細身を震わせ、息を詰まらせながらそう答えるも、

「変態、か……しかしお前は今からその変態みたいなことを進んでやるんだろう？ ほお

れ、変態にふさわしいおねだりの言葉を教えてやろう」

例によって屈辱的な台詞を覚えこまさせられる。

「くうっ……」

小さく呻いた後、それまで四つんばいだった怪盗少女は立ち上がる。しかし膝は最後まで伸ばさない中腰の姿勢だ。軽く腰を落とした姿勢のままじりじりと後退し、椅子に腰掛ける男の視線に合わせてゆつくりと豊臀を突き出す。

あまりにも情けないその体勢に泣きたい衝動に駆られながら、それでも溜奈は更に拘束具から剥き出しとなった白桃尻の割れ目に指を沿え、尻たぶを左右にむにいと割り開いた。

「わたし、ルナティックマリアの糞穴を……どうぞご主人様の逞しいオチンポで……心行くまでご賞味くださいませ……」

言いながらゆっくりと膝を曲げて更に尻を迫り出し、男の膝に乗るようにゆっくりと腰を落とす。狙いが定めやすいよう左右の手で尻たぶを割り開いたまま、剛直に肛門を近づけてゆく。

(挿れられるんだ……お尻に、おちんちん)

排泄孔を玩具にされる汚辱ももちろんだが、愛撫に浅ましく反応してジンジンと疼いている肛門へペニスを挿入されたらどうなってしまうのだろうかという自分への恐怖が強かった。

「ん………くあうっ!! あつ……いいっ……!!」

ずにいつ………ようやく亀頭が触れた。途端に熱気が肛門粘膜を焼いた。たぎった牡熱はそのまま直腸の奥まで伝わってくる。まだ軽く先端に触れただけなのに。熱を孕んだ疼痛に桃穴は一気に溶解しそうだ。

「そのまま腰を落とせ——排泄するみたいに力を抜きながら、ゆっくりとな」

この場では手馴れた男の助言に従うほかない。瑠奈は命令されるままに息み、肛門口を押し広げながら牡を迎え入れようとする。

「うっくうっ……んふいつ、だめっ、太すぎ……入るわけえっ………んほおっ!!」  
ずぬゆぐうううっつ!!

んの臭いおちんちんもあるうっ♡)

周囲から差し向けられる怒張の数々を前に思わずぐくりと喉を鳴らしてしまふ。碧眼は目移りするようにペニスを品定めし、それを女陰や肛門、唇で受け入れることを想い期待に胸を高鳴らせる。興奮に鼻の穴は開ききり、牡を啜える口端からは牛みたいなねっとりとした唾液がだらだらと溢れ出ていた。

「凄いエロ顔させちゃって、ホントにチンポ大好物なんだな！ ご褒美に膣内射精でイかせてやるよ、ほらっ、ほらっ、ほらあっ!!」

「大好きなお尻の穴にもたっぷり射精してあげるよ。瑠奈ちゃんのお腹の中、精液腸詰にしちゃうからね——うっ!!」

びゅくっ、びゅぶっ、びゅびゅびゅ——ツツツ!!

どびゅぶっびしゅぶっびゅばっびゅぶっびゅくんっ!!

「んいひいひいっお腹熱いイイツ!! お尻にも出てるっ熱いのいっばいきてるううっ♡  
ふああっ両方でイクうッ、中出し感じすぎちゃうのっ！ ザーメン浣腸も気持ちよすぎるうううっ♡」

子宮口と直腸奥で同時に熱い进りが爆ぜた。前後の秘門で一気に極めた少女はビクンビクンと痙攣するように震え、背骨が折れそうなほど身を反り返らせる。

あれほど恐ろしかった膣内射精も今は快感しかもたらさない。子宮に子種を植えつけられる被虐感と胎内を焼き払われるような熱さが牝神経を痺れさせる。

母の仇らにより何度も味わわされたはずの腸内射精もまた、時を置いて再び味わったそれは慣れも手伝い、今や快感以外のなにも生まなかった。肛悦に腸壁が熱くたぎり、腸液がどっと溢れて桃穴を濡らす。肛門から内臓全体が甘く蕩けてゆくように、絶頂快楽が身体の内側を遡上してゆく。

身体の中を男でいっぱい満たされてゆく——両穴受精の恍惚に頬が緩み、とうに弛緩した口元には卑猥な笑みが自然と浮かんだ。

「ケツに射精されてイッてやがる……この牝豚め、徹底的に苛めてやるぞ」

「ふっひいっ……こんなに、いっぱい……」

尻からペニスを抜かれた瑠奈は周囲を取り囲む怒張の森の前に、思わずごくりと喉を鳴らす。

「ほら、みんな瑠奈ちゃんのこと妊娠させてあげる気まんまんだよ？ みんなにオマンコよおく見えるようにおねだりしてごらん」

直腸射精を終えたばかりの男が卑猥に囁く。

（みんな、あたしを妊娠させたい——それじゃ妊娠させるまではあたしのこと、みんなしてかまってくれる!!）

肉悦にくすんだ理性は男の言葉に歪んだ希望を見出す。瑠奈は言われるままごろんと仰向けに転がると、M字に開いた膝の下から腕を通し——。

くばあっ♡

潤んだ姫割れを自らグツと左右に割り開き、可憐な肉花卉を咲き綻ばせる。

「みんなあつ、あたしがんばつてみんなの赤ちゃん妊娠するからあつ!! みんなも瑠奈のおまんこで気持ちよくなつてえつ、みんな瑠奈で筆おろししてえつ♡」

はしたない懇願が驚くほどすんなりと口を突いて出る。姫割れと排泄孔は牡を欲して絶えずヒクヒク蠢き、まるで二つの淫穴がおねだりの言葉を紡いでいるかのようだった。

「へへ、言われなくなつてしつかり俺の子種を植えつけてやるぜ!!」

「なんだとおつ、るなたんを妊娠させるのはボクだいつ!!」

媚婦顔負けのアイドルの誘惑に、男たちは蜜花に群がる虫のように一斉に美肉へと飛びついていった。

※

「あつはあつ、んつ、ふあうんつ…いいのつ、おまんこきもちいいひいんつっつ♡」  
ホール全体に瑠奈のはしたない嬌声が反響する。陵辱が始まって既に半日が経過していたが、男たちは飽くことなくアイドルを輪姦し続けていた。

これまで何人の男から膣と直腸、口腔へと精を注がれたのか——あまりの人数と、快感で脳が蕩けているせいでもうわからない。少なくとも百人以上には射精されているはずだ。それでも会場にはまだまだ、瑠奈に子種を植えつけたくて仕方ない牡が群れていた。

ピンクを基調とした衣装は胸元を引き裂かれ、ところどころに強引に引きちぎった跡が散見される。フリルいっぱい可愛いスカートも今やぼろ布同然にまで無残に切り裂かれ

て、少女の肢体を視線から護る役目を完全に放棄していた。

たった一人で男を受け止め続けるアイドルは白い肌も破り裂かれた衣装もすべて男たちの黄ばんだザーメンによつて汚されて、さながら雪化粧を施されたかのようなのだ。

それでも瑠奈はとにかく目の前にペニスを差し出されれば餓えた犬のように食らいつき、男が膣内に射精すれば、すぐさま別の男に跨つて腰を振っていた。

百人を超えた辺りでぐったりとしてきたものの、男たちは瑠奈が捨てられることに異常な恐怖を感じているのを悟り、それをネタに彼女を無理やり促していた。

今も騎乗位で男を啜えながら同時に肛門を犯され、更にはその豊満な胸の谷間にまで男根を挟みつつ卑猥な腰振りを演じている真つ最中であつた。

「ほらほら瑠奈ちゃんもつと腰振つて、そんなんじゃボクたちファンやめちゃうよ？」

アイドルを乗せた男が薄ら笑いで言いながら、ふりふりと前後運動を繰り返す尻尻をせつつくようにパンパンッと叩く。

「やだっ捨てないで……もつと頑張るからあ瑠奈のことちゃんと見ててえっ!!」

（また誰も自分を見てくれなくなる——あたま、ひとりぼっちになっちゃう……そんなの、そんなの絶対イヤあつ!!）

孤独を恐れる瑠奈はもう必死で、男たちを繋ぎとめようと彼らの言うがままに従うばかり。今や瑠奈は彼らの奴隷だつた。彼らの嗜好を聞き、それを満たすためだけに進んで身体を差し出す牝奴隷、それこそ男たちの言う「ビッチ」そのものに成り果てていた。

「ほらっ瑠奈のおっぱいおおきいでしょっ、柔らかいでしょっ？ ちんちんびゅーってしていいんだよっ、全部ぜんぶっ瑠奈がごつくんしたげるんだからあっ♥」

どうにかみんなに好かれたい——そんな思いで上目遣いで媚を売りながら、墮ちたアイドルは必死に男を繋ぎとめようと乳谷間で捕らえた剛直を扱き上げる。

「すごいよ瑠奈ちゃんのパイズリっ……ほら、射精するから残さず飲んでっ!!」

びゅるっびゅくびゅくびゅびゅびゅうううっ!!

「はあひっ♥ はっむうう……んごきゅっごきゅっごくんっ……ぷあっ♥」

男の下種な命令にも従順に返事をし、撃ち出される子種汁を嬉々として喉に流し込む。

最初は男たちに気に入られるため、半ば無理をして飲み下していたそれだったが、いつの間にか与えられるザーメンはシロップのように甘美な蜜の味へと変わっていた。口端からたらりとこぼれる雫さえもつたいなく思い、ペろりと舌を出して舐め取ってしまう。

「すっかりザーメン中毒じゃん……ほら瑠奈ちゃん、大好きなチンポだよ」

「おチンポおっ♥ チンポすきっ、ザーメン臭いのだいしゅきいっ……はむっあむうっ♥」

快感に脳の爛れたアイドルはろれつの回らない牝鳴き声で言いながら、周囲で待機する男根に手を伸ばし数本同時に口元へと運ぶ。

「瑠奈ちゃんはホントにエロいなあ……マジで全身性器って感じ」

「ははっ、オマンコが服着て歩いてるって感じだよな!! で、瑠奈ちゃん本人はどこが一番感じちゃうのかな？」

「ひいんううっ…えつとお、おむねえっ!! おっ、おっぱいまんこでおちんぼ食べるの大しゅきいっ♥」

尋ねてきた男に胸で奉仕している真つ最中だったため、とつさにそう言っただけで媚を売る。しかしその返答に他の男が黙ってはいない。

「ええっ、瑠奈ちゃんはおケツ便器なんだから当然お尻が性感帯なんじゃないの? さつきからケツ穴ピクつかせてヒトのザーメン搾り取るうとしてるくせにさあ?」

そう言いながら肛門に突っ込んだ男が腰を「の」の字に動かして肉棒の腹でぐりぐりと直腸をくじる。腹の底まで響くような鈍い肛悦に、少女の肢体がビクビクと躍った。

「ひゃんっお尻イッ♥ そうですうっ…瑠奈っば、おけちゅが一番感じちゃうのおっ!! うんちの穴苛められるのが大好きなへんたひっ♥ 変態なんですうっ、うそついてごめんなひゃいんっ♥」

「やっぱりね。そりゃ皆の前でザーメンお漏らしして濡らしまくってたくらいだもんな」  
「でもマンコよりお尻がいいの? ほんとにい? これでもそんなこと言える?」

瑠奈のはしたない告白に、今度は膣内に挿入している男が激しくピストンしてくる。同時に恥丘へと伸ばされた別の男の指先が、剥き身の肉真珠を摘んでクリクリと捏ね回してきた。

「ふひいっ、もちろんおまんこもスキイ、クリちゃんシコシコもだいしゅきいっ♥  
ふええっもうわかんないっ、どこでもおまんこおっ!! るなもお身体中おまんこなんだも

んっ、ぜんぶオチンポ穴なんだもんっつ!! どこが一番かなんてそんなのわかんないよ  
おっ♡」

その絶叫は本心だった。全身どこもかしこも気持ちいい。男に触れられた場所全部が性器に造り替えられてしまうみたいだった。今や瑠奈は身体中が陰核と同じくらい敏感極まる全身性感帯と化していた。

「ふうっ、ボクも膣内なかで射精だすよっ、絶対妊娠させてあげるからねっ!!」

「俺もっ瑠奈ちゃんのお尻ザーメンでいっぱいにしてやるよ!!」

「身体中で妊娠しちゃうくらい、ザーメン潰けにしてあげるからね♡」

前後の男が限界を告げ、周囲の男たちもまた口々に叫び精を撃つ。

びゅびゅびゅ——ツツ、びゅくっびゅくっびゅぶびゅううっつ!!

どぶぶぶばっ、びゅば、びゅば、びゅびゅびゅ——っつ!!

ぶゅぶぶっ!! びゅゆるっ!! びるびるびるううう——っつ!!

「ひいんっうううっ、受精するうっ♡ みんなのザーメンで身体中でじゅせえしながらイクうっ♡ あかちゃん身ごもってイクのおッ、あああああっイクっ、イクッ、いぐうう

ううう——ツツツ♡♡♡」

視界がザーメンの白一色に染まるほどの牡精の乱れ撃ち。子宮と直腸、更に粘膜同然と化した牝肌を牡精による一斉射撃に晒されて瑠奈は凄まじい絶頂に晒された。

子宮から脳髄までを桃色の閃光が刺し貫く。頭の中が快感一色で塗り潰され、視界がホ



ワイトアウトした。甘く痺れ続けていた腰は砕け、身体中の細胞が弾けるようにして一斉に喜悦に震えだす。心も身体も、浴びせかけられるザーメンと一緒に残さず溶け出してゆくかのようだった。

気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい……それ以外の感情をすべて忘れたように快樂だけが意識を支配し、それ以外何も考えられない――。

「はあっ、あはあっはあっ……あっ、あひええ……♥」  
ばしやりっ。

凄まじい全身絶頂の浮遊感覚からようやく戻ってきた瑠奈は一転、ザーメン溜まりに顔から落とされた。

桃色プロンドの発情アイドルは白濁液に火照った頬を濡らし、バテた犬みたいにだらりと舌を垂らしながらも、すぐさまうつろな瞳でもってきよろきよろと周囲を見やる。

「ほら、まだ終わりじゃないよ。まだ何百人も瑠奈ちゃんと犯りたいってうずうずしながら待ってるし――全員終わってもまだまだ許してあげないからね♥」

「生まれた赤ちゃんが女の子なら、親子どんぶりで可愛がってあげるしな」  
「男の子でも問題ないって、瑠奈ちゃん似なら究極の男の娘になるはずだよ」

男たちが口々に更なる陵辱を宣言しても、瑠奈はその頬を緩めるばかり。  
「ふひええっ……可愛がってくれりゅうっ？ えへえっ、うれしいっ♥ みんなるなのことちゃんと見ててっ、そしたらるなんでもするっ!! いつでもどこでもファンのみんな

のオチンポびゅっぴゅお手伝いする、アイドル便器になっちゃうっ♡」

まだかまってもらえる、気持ちよくしてもらえる——そのことに安心したのだろう。壊れた笑顔を振りまきながら、堕ちたアイドルは身体目的と化した元ファンらを相手に媚を売り続けていた。

※

「フフ、瑠奈ってばすっごい惨めーっ。見てみてお父様、あのアへ顔っ♡」

輪姦の様子を遠目に見ていた、声の主——美蘭が心底嬉しそうに笑う。

「フフ、お前の望みが叶ったようでは何よりだ。そしてワシの念願も今——」

その隣では父である大作が、回収されたオーパーツを手にはくそ笑んでいた。

「このマスク——マリアのヤツめが自分の意識を盗み取らせたこのマスクがあれば」

混乱に乗じて、ステージに掲げられていたマリアは降ろされていた。瑠奈を中心とした人垣はオブジェやそれに近寄る二人のことなどまるで気にもせず、ただひたすらに堕ちたアイドルの穴に子種を注ぎ続けている。

大作はマリアの傍に寄ると、その名のとおり聖母のような寝顔にそっとマスクを被せる。

「さあ目覚めろマリア。もう逃げ場はないぞ——」

その言葉が届いたのか。マスクを被せられるやブロンドの女は十五年眠り続けていたのが嘘のようにゆっくりと目を開いた。コバルトブルーの瞳が辺りを一瞥し、三度瞬く。

「お目覚めかね、マリア。このときをどれだけ待ったことか——ちなみに今は二十一世紀

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で  
**好評発売中**



**「…藤田君は責任取るべき」**  
陸月への想いに身を焦がすマキナ  
彼女は夜の教室で……!?

小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪月

**思春期なアダム3** 一人泣きの子猫

女幹部メル様の  
**セカイ征服計画!**

小説…高岡智空 / 挿絵…鈴眼依縫



全国書店で  
**好評発売中**

**悪の秘密結社vs正義のヒーロー**  
イケない戦いの記録!

全国書店で  
**好評発売中**



**「当方Mドレイ希望」**  
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

小説…酒井仁 / 挿絵…にのこ

**不死の吸血姫がDSのご主人様を募集**  
しているようです

- 既刊LINEUP**
- 山獄学園戦姫 / ノナガ! ①～③
  - 均瀬 / 帝都少女探偵団 赤い罠路を撃て!
  - BLANGEL 輪になりにて踊る患者の夜
  - 借金お嬢クライス ①～③
  - プリンセスバニシ / 文籍する美咲と魔姫
  - 無敵の姫騎士がDMに目覚めたようです
  - ビルグリムメイデン ①～②
  - 呪詛喰らい前 / カースイーター
  - 魔海少女ルビエル



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**ヴァルキリエ**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

**モバイル二次元ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!